資料１－１

平成 26 年度　北九州市発達障害者支援モデル事業報告書

成人期以降における生活支援プログラム開発

Ⅰ．事業要旨

北九州市発達障害者支援センターの相談者の中で、成人期の占める割合は高く、平成 25 年度は、1003 人の相談者のうち、19 歳以上の相談者は 499 人であった。また、継続して相談があった人の中で 172 人には所属がなく、在宅生活を送っている。在宅生活を送る人の中には、学生時代や就職後の挫折経験により対人緊張や不安が非常に強い人や、障害特性により、個別の面談を重ねても、なかなか状態が改善しないケースが含まれ、相談が長期にわたって継続している状態がある。このプログラムの目的は、在宅生活が続いており、障害福祉サービス事業所の利用等も難しい相談者を対象に、発達障害者支援センター職員と共に行う作業体験等を通して、自信をつけてもらい、社会との接点を見つけていく契機にしてもらうことである。発達障害者支援センターに継続的に相談がある、19 歳以上の人を対象とし、関係施設を利用して、発達障害者支援センター職員と一緒に簡単な机上作業や清掃等の作業を行ってもらう。また、本人の状態や希望に合わせ、当事者会への参加に繋いだり、地域の障害福祉サービス事業所での体験実習を行い、事業所の正式利用に繋いでいく。今年度は 13 人がプログラムに参加し、2 人が障害福祉サービス事業所を正式利用した。事業所利用に至ったケースは少ないが、5 人が事業所での体験実習に参加し、将来は正式利用したいという意向を示している。また、行動記録や本人、家族へのアンケート調査結果からは、参加者がプログラム参加中に、職員に自分のことを話す機会が増えたり、生活面においても、「店員に聞くことができるようになった」など、対人・コミュニケーション面の変化が見られていることがわかった。また、家族は「早起きするようになった」、「外出の機会が増えた」、「表情が明るくなった」といった変化を感じていることもわかった。参加者の殆どは在宅期間が長く、すぐに障害福祉サービス事業所に繋ぐことは難しいが、参加することで状態が改善し、家族との関係がよくなったケースもあった。このように、生活支援プログラムは、所属がない発達障害者にとっての有効な社会資源になっていると考えられる。また、本事業では、本人へのアプローチだけではなく、発達障害の本人、家族に対して、様々な就労スタイルや地域資源があることを理解してもらい、就労に向けて必要なことを学んでもらうための、「発達障害者の就労支援について」の研修会と、発達障害者を受け入れている福祉サービス事業所の支援技術の向上ために「発達障害者支援のための実務研修会」を実施した。どちらの研修会も好評であり、就労支援についての研修会では、「就労に向けて必要なことがわかった」、「各機関の役割やサービスの内容などが分かりやすかった」等の感想が得られた。また、障害福祉サ

ービス事業所対象の実務研修会では、高機能の発達障害に特化して支援を行なっている障害福祉サービス事業所の取り組みの報告について、「参考になった」や、「現場でもいかしたい」という感想が得られた。

今後も実践に生かせる研修会を実施していくとともに、本プログラムにおける取組や、効果について情報を発信し、地域の事業所や相談支援機関等と連携していくことが必要と考える。情報発信の方法や、連携の在り方が今後の課題である。

Ⅱ．事業目的

本事業では、相談者の中で、障害福祉サービス事業所の利用も難しく、在宅生活が続いている人を対象に、発達障害者支援センターの職員とマンツーマンで作業を行う場を提供する。簡単な机上作業やパソコン作業、清掃作業等を通して、自身の作業面での得意・不得意を理解したり、コミュニケーションの練習を重ねたりする中で、自信をつけ、社会参加の契機としてもらうことを目的とする。

また、作業体験だけでなく、本人や家族に向けた「就労支援研修会」を実施し、本人や家族が、多様な働き方を知って、仕事へのイメージを持ってもらう。更に、地域の障害福祉サービス事業所に対しては、先進的な取り組みをしている障害福祉サービス事業所の取り組みを紹介するための研修会を実施し、有効な支援技術について学んでもらう。このような取り組みを通して、本人を支援する家族や障害福祉サービス事業所等の理解も促進していくことを目的とする。

Ⅲ．事業の実施内容

１．発達障害者支援センターにおける作業活動

①　対象者

北九州市発達障害者支援センターに継続的に相談がある人を対象とした。対人緊張や不安が強く、長期にわたって在宅の状態が継続している人や、自己理解が難しく、高校卒業後、適切な進路選択ができないままに在宅となっている相談者を対象とした。

今年度参加した対象者 13 名の内訳を、表 1 に示す。

表 1　対象者の内訳

年齢	19 歳：1 人　20 歳代：5 人　30 歳代：2 人　40 歳代：5 人
性別	男性：9 人　女性：4 人
診断名	アスペルガー症候群：1 人　高機能自閉症：3 人　自閉症：1 人 広汎性発達障害：4 人　注意欠陥多動性障害：1 人　未受診：3 人
手帳	精神障害者保健福祉手帳 2 級：3 人　精神障害者保健福祉手帳 3 級：2 人 療手帳 B2：4 人　療育手帳 B1：1 人　なし：3 人
精神科通院	あり：11 人　なし：2 人
仕事経験	あり：5 人　なし：6 人　福祉サービス事業所：2 人
プログラム	1 年未満：5 人　　1 年以上～2 年未満：5 人

参加期間	2 年以上～3 年未満：3 人

② 実施内容

方法	北九州市発達障害者支援センターがある、北九州市立総合療育センターの会議室や相談室等を使用し、参加者と発達障害者支援センターと職員がマンツーマンで、作業を行った。参加者のうち 2 名は、月 1 回合同で作業を行なった
頻度	参加者のペースに合わせて実施した。頻度は、週 1 回（3 人）、月 2 回（4 人）、月 1 回（6 人）で、1 回の参加時間は概ね 1 時間であった。
作業内容	簡単な机上作業（ラベル貼り、スタンプ押し、ファイル作成、プリントの三つ折りなど）や、パソコン、清掃などを職員と行なった。参加者の興味関心や状態に合わせて、手順書やコミュニケーションカードを使用するなどの配慮を行い実施した。

③ 参加状況

平成 27 年 3 月 1 日現在の参加状況を、表 2 に示す。

表 2 参加状況

状態	人数	参加状況
参加中	11 人	・継続して参加（10 人） ・事業所の体験利用後、8 月より正式に通所を始めるが、体調不良等が原因で、2 月よりプログラムに戻る（1 人）
終了	1 人	・就労支援継続 B 型事業所へ移行（1 人）
中断	1 人	・体調を崩し、6 月よりプログラム参加を中断（1 人）

2．障害福祉サービス事業所での体験実習

① 対象者

1－①の対象者の中で、体験実習を希望した 5 人に対して実施した。

② 実施内容

参加者の特性や興味関心、居住地等に配慮して事業所の選定を行い、頻度は利用者の状態に合わせ設定した。毎回、発達障害者支援センターの職員が同行し、一緒に 1 時間程度の作業を行った。作業内容は、事業所の作業内容によって異なるが、簡単な組み立てや検品、梱包、菓子箱折りなどの室内軽作業などである。本人希望により、1 名が正式利用に繋がった。

③　参加状況

前期と後期に分けて、計４か所の障害福祉サービス事業所で実施した。（資料 1-1）

体験実習参加者と実習場所を、表３に示す。

表３　体験実習参加者と実習場所

	期　間	参加者	参加回数	実習場所
前期	平成 26 年 6 月 1 日 ～平成 26 年 7 月 31 日	１名	５回	就労支援継続Ｂ型事業所　N
		２名	３回	〃　N
後期	平成 26 年 10 月 1 日 ～平成 26 年 11 月 30 日	１名	７回	就労支援継続Ｂ型事業所　O
		１名	６回	〃　N
		１名	２回	〃　P
		１名	２回	〃　Q

発達障害者支援センター内での作業活動、並びに障害福祉サービス事業所での体験実習の効果検証に関しては、年度当初（年度途中から参加した人は参加開始時）と、年度末にＳ-Ｍ社会生活能力検査とＧＨＱ精神健康調査を行い結果を比較した。また、活動時の行動記録からの検証を行うとともに、年度末に、アンケート調査を本人（資料 1-2）と、家族（資料 1-3）に対して実施した。

３．発達障害のあるご本人および家族のための就労支援研修会

プログラム参加者やその他の発達障害当事者とその家族が、障害に応じた様々な働き方や、就労に向けて必要なことを学んでもらうために、平成 26 年 12 月 14 日（日）に研修会を実施した。（資料 1-4）

効果検証は、研修会終了後にアンケート調査を実施した。（資料 1-5）

４．障害福祉サービス事業所職員に対する実務研修会の実施

プログラム参加者は、まずは、障害福祉サービス事業所の利用等が望まれるが、北九州市において、発達障害に特化した事業所は１カ所しかなく、事業所の発達障害についての理解を進め、支援技術の向上を図ることが課題である。そこで、障害福祉サービス事業所の職員を対象とした研修会を平成 27 年 3 月 15 日（日）に実施した。（資料 1-6）

また、研修会終了後には、生活支援プログラムについての事業説明を行い、障害福祉サービス事業所の体験利用等における、理解と協力を求めた。

対象は、障害福祉サービス事業所において成人の発達障害者を支援している職員や、ひきこもり支援センター、若者サポートステーション等の支援機関職員とし、研修会終了後にアンケート調査を実施した。（資料 1-7）

Ⅳ．分析、考察

１．作業活動及び障害福祉サービス事業所での体験実習

①　S-M社会生活能力検査の結果

検査は、年度始めと年度末に発達障害者支援センター職員が、本人または家族から聞き取りを行い実施した。年度を通して参加している９人の結果を表４に示す。上段が今年度の開始時の数値で、下段が年度末の数値である。

変化が見られた項目のみ、年度末の数値を示した。

表４　S-M 社会生活能力検査の結果

	A	B	C	D	E	G	H	I	K
社会生活年齢	13-0以上	6-9 7-0↑	7-5	7-6	11-0 11-4↑	8-4 8-10↑	8-3 8-6↑	12-0	13-0以上
社会生活指数	100	81.0 84.0↑	57.1	57.7	84.6 87.2↑	64.0 68.0↑	63.0 65.0↑	92	100
身辺自立	12-6以上	10-6	8-6	10-6	10-6	8-6 10-6↑	10-6	12-6以上	12-6以上
移動	13-0以上	11-1 12-0↑	8-4	6-6	13-0以上	11-1	7-5 8-4↑	13-0以上	13-0以上
作業	13-0以上	6-7	8-9	10-2	13-0以上	5-10 6-7↑	7-4 8-0↑	12-0	13-0以上
意思交換	13-0以上	6-2	6-8	7-2	9-10	11-8	9-0	7-8	13-0以上
集団参加	11-2	3-1	4-2	5-5	9-4 10-2↑	3-7 4-2↑	7-3	13-0以上	12-6
自己統制	13-0以上	6-10 7-4↑	9-2	7-4	10-11 12-2↑	13-0以上	9-2	13-0以上	13-0以上
	変化なし		変化なし	変化なし				変化なし	変化なし

※↑は状態が良くなっていることを示す。

B、E、G、H の４人は、身辺自立、移動、作業、集団参加、自己統制の数値が若干上がっている。具体的には、「行きなれた場所に歩いて行く。」、「病気にかからないように自制する。」、「汚れた服を自分で着替える。」等の項目が達成された。一方で、意思交換では変化が見られた人はいなかった。数値に変化がなかったのは５人であるが、家族からの聞き取りの中では、「自分でインスタントラーメンを作るようになった。」などの変化が見られた相談者もいた。

② GHQ 精神健康調査の結果

検査は、年度始めと年度末に実施し、本人が記入した。年度を通して参加している 8 人の結果を表 4 に示す。

中等度以上の症状と認められる得点は下線で示した。中等度以上は、「身体症状」と「不安と不眠」が 4 点以上、「社会的活動」と「うつ傾向」が 3 点以上である。上段が今年度の開始時の数値で、下段が年度末の数値である。変化が見られた項目のみ年度末の数値を示した。

表 5　GHQ 精神健康調査の結果

	B	D	E	G	H	I	K	L
身体的症状	1/7	5/7 6/7↓	0/7	5/7	2/7 4/7↓	0/7	3/7 4/7↓	6/7 7/7↓
不安と不眠	5/7	4/7 6/7↓	2/7 3/7↓	1/7 4/7↓	0/7	0/7	6/7 4/7↑	5/7 7/7↓
社会的活動	0/7	1/7 4/7↓	2/7	0/7 1/7↓	0/7	0/7	6/7	2/7 5/7↓
うつ傾向	1/7	4/7 7/7↓	0/7	1/7	0/7	0/7	6/7	7/7 5/7↑
	変化なし					変化なし		

※↑は状態が良くなっていることを、↓は状態が悪くなっていることを示す。

D、E、G、H、L の 5 名は、数値的には状態が悪くなっているが、D、G、L は、評価時に家庭内での問題（家族の病気や、家族とのトラブルなど）を抱えていたことが影響していると考えられる。E は、福祉サービス事業所の利用中に体調を崩し、評価時もコンディションが整わない状態が続いていた。

③ 行動記録の結果

参加者の、行動記録から抽出したエピソードを、表 6 に示す。

表 6　行動記録から抽出したエピソード

	エピソード
対人・コ	・ 福祉サービス体験実習に向けて、2 箇所の事業所見学を行った際、「同年齢の方はいますか。」と自ら質問する。 ・ 職員が挨拶した時に、僅かだが会釈するようになる。 ・ 合同で作業を行っている参加者が、10 枚数えるたびにメモ帳に記入しているのを・横目で見て、同じやり方でやってみたいと意思表示する。 ・ 材料がなくなると「次のも折って良いですか。」と確認する。また、職員に対し

ミュニケーション面	流れ作業を提案し、「(この方が) 効率が良いと思います。」と提案する。 ・ 合同で作業を行っている参加者が本人の終了を待っていることに気付き、作業スピードを上げる。 ・ 作業終了後に自分が鑑賞した映画の「チラシ」を見せ、自ら感想を話す。 ・ エクセルを使ってのカレンダー作成で、分からない時に、本人から質問する。 (障害福祉サービス事業所の体験実習時のエピソード) ・ 作業が上手くいかず、同じ箇所を何度も繰り返し行っている。事業所職員に声をかけられると、「上手くできません。」と伝える。 ・ 自分から事業所の扉を開け「こんにちは」と挨拶をする。 ・ 初めての体験実習で、職員に自ら「こんにちは」と挨拶をする。作業中分からないところについて、自ら事業所の職員に質問をする。
作業面	・ 作業後「(自分には) 動きがある仕事の方がよい」と話す。 ・ パンフレットを 10 枚ずつ揃え、交互に積み重ねていく作業を行う。20 分行うと、ペンを取りだし、10 枚数えるごとに紙に記入していく。 ・ 職員が作成したものを手に取り、「これを見本にしたいので、机の上に置いておきます」と言う。 ・ 「単純作業は好き」と話す。 ・ 「パソコン作業は楽しい」と言う。 (障害福祉サービス事業所の体験実習時) ・ 「こういった作業 (箱折りの仕事) は嫌いではない。」と話す。
自信や意欲面	・ 「郵便局の配達スタッフの採用試験を受けて、アルバイト代でパソコンを買いたい」と話す。 ・ 「簡単な作業は出来るが、集団が苦手である。少人数で作業できる場 (障害福祉サービス事業所) があれば見学は可能である。」と言う。 ・ 他の参加者との合同の作業で、作業スピードが早くなる。作業中は席から離れることができなかったが、予め出来上がった物は持って来るよう伝えておくと、席を立って持って来ることが出来た。 ・ 来年は、「金銭管理を出来るようになりたい」、「一人で外出が出来るようになりたい」、「ソーシャルクラブなどの活動の場に参加したい」、と自分から話す。 ・ 来年も、「今のようにここにきちんと来たいです。」と話す。 ・ 「前回の作業を生かして家計簿を作成した」と報告がある。 (障害福祉サービス事業所の体験実習時) ・ 「次回から作業をもう一時間伸ばしてみようと思う」と自ら申し出る。 ・ 作業終了後、「だいぶ作業に慣れた。事業所の職員にも気軽に質問をすることができる。」、「次回もこのような機会があれば、(この事業所で) 体験実習を行いたい。」と、同行した職員に話す。 ・ 実習終了後、「作業は、初めは難しかったけれど、段々慣れた。初めの方は緊張していたが、後の方は大丈夫だった。」と話す。 ・ 「暖かくなったら、午後のみ週 2 日程度であれば (事業所に) 通えそう。」と話す。

２．プログラム参加している本人へのアンケート調査結果

年度末の時点で、参加していた 11 名全員に対して実施した。アンケートは、対象者の特性に配慮し、職員がインタビューしながら記入を行った。

①　「生活支援プログラムに参加している目的」を、表 7 に示す。

表 7　「生活支援プログラムに参加している理由は何ですか」（複数回答可）

理　　由	人数（人）
ア　日中活動の場が欲しいから。	4
イ　家族以外の人との関わりをもちたいから。	8
ウ　作業（仕事）のスキルを身につけたいから。	4
エ　コミュニケーションの練習をしたいから。	8
オ　福祉サービス事業所等の利用の準備がしたいから。	1
カ　参加を勧められたから。	4
キ　わからない。	0
ク　その他	0

②　「活動には慣れたか」を、表 8 に示す。

表 8「活動には慣れましたか。」

	慣れた	少し慣れた	変わらない	慣れない	負担になっている	わからない
人数（人）	7	4	0	0	0	0

＜その理由について＞
・回数を重ねたから。（４）
・最初の頃と比べて、手際が良くなれたと感じ取れたから。
・最初は不安だったが、他のメンバーと一緒に作業をやり始めて、慣れてきたと思う。
・ソーシャルクラブに参加したのも慣れた理由だと思う。
・スタッフが優しく、分かりやすく話をしてくれるので慣れた。

③　「生活支援プログラムの内容に満足しているか」を、表 9 に示す。

表 9　「生活支援プログラムの内容に満足していますか。」

	満足である	少し満足である	ふつう	少し不満である	不満である	わからない
人数（人）	4	3	4	0	0	0

＜その理由について＞

（満足・少し満足である）
・仕事に慣れてやりやすくなったから。
・スムーズに出来る簡単な作業なのでよい。
・大満足しているというものではないので、少し満足にした。
・先生が優しく、話しやすいから。
（ふつう）
・もう少しレベルの高いこともしてみたい。

④　「生活支援プログラムを開始して、自分自身の理解についてや、生活の中で変化を感じることがあったか」を、表 10 に示す。

表 10　「自分自身の理解についてや、生活の中で変化をかんじることがあったか」

＜仕事のスキルに関する変化＞ ・仕事において必要なことが、段々身についているのではないかと感じる。 ・事業所での経験を通して、手先が不器用だと感じた。 ・封筒の糊付けが苦手なことが分かった。糊付けをする時に、下に敷いている紙が汚れるのが嫌なので、時間がかかってしまう。
＜対人面・コミュニケーションに関する変化＞ ・アニメグッズを買いに行った時、分からないことを自分から店員さんに聞けるようになった。 ・外食した時に、注文を自分で伝えることができるようになった。 ・仕事はできるが、自分からなかなか人に話しかけられない。 ・家族と買い物に行ったり、外に出かける機会が増えた。 ・家族以外の人と話すようになった。施設体験は、つばさより緊張した。 ・話しかた等、なるべく理性的にするよう、気をつけるようになった。
＜生活面に関する変化＞ ・前に比べると買い物や図書館等に出かけることが増えた。 ・無理矢理でも外にでるので、（生活支援プログラムに参加するために）外に出ることが習慣化した。
・変化点がない（1） ・無回答（2）

⑤　「今後の生活や仕事についてどのような希望をもっているか」を、以下に示す。

・アーティスト、配達員、運転士になりたい。
・人と接しない仕事や、イベントの裏方の仕事ならできるかもしれない。
・清掃の仕事はしてみたい。教えてもらえばできると思う。接客の仕事に比べれば、汚くても苦にならない。
・いつか作業所に行きたい。
・自分に合う作業が見つかると良いと思う。
・仕事に就きたい。人付き合いをよくしたい。
・居住区以外のところに、一人で外出したことがないので、できるようになりたい。家から親戚の家まで行けるようになればよいと思う。
・今の状態を続けていきたいと思っている。今後については検討中。
・今は全く考えていない。まずは体力づくりをする。
・今はよく分からないし、あまり考えたくない。
・無回答（2）

⑥「生活支援プログラムについての要望」を、以下に示す。

・もう少しレベルの高いこともしてみたい。
・時間を伸ばしたい。
・他の人と一緒に作業をしたい。
・次のステップに進めると思った時、職員からの提案があるとよい。
・今のままでよい。
・特になし（3）
・無回答（2）

本人へのアンケート調査の結果から、プログラムに対しては、11 人中 7 人が概ね満足しており、4 人は「ふつう」と答えている。「ふつう」の理由を答えている人は 1 人で、「もう少しレベルの高いことをしてみたい。」と答えている。「プログラムに参加している理由」としては、8 人が、「家族以外の人との関わりをもちたいから」と、「コミュニケーションの練習をしたいから」と答えており、対人・コミュニケーション面での変化を望んで参加している人が多いことが分かった。「プログラム開始後の自身の変化」としても、対人・コミュニケーション面について変化を感じている人が 3 人、生活面でも、外出がしやすくなったと答えている人が 3 人いた。一方で、「福祉サービス事業所の等の利用の準備がしたい」と答えている人は 1 名であった。「今後の生活や仕事についての希望」でも、「作業所にいきたい」と明確に答えている人は 2 人であり、「アーティスト、配達員、運転士になりたい」や、「イベントの仕事ならできるかもしれない」、具体的な職業について希望を述べている人が 2 人いた。本人の希望を確認しながら、担当者と、短期目標と長期目標を確していくことが必要と考えられる。

3　家族へのアンケート調査結果

アンケート調査が可能な 10 人の家族に対し実施した。

①　「生活支援プログラムの内容に満足しているか」を、表 11 に示す。

表 11　「生活支援プログラムの内容に満足していますか」について

	満足である	少し満足である	ふつう	少し不満である	不満である	わからない
人数	6	2	0	0	0	2

＜その理由について＞

（満足・少し満足である）

・前に比べると、明るくなったから。(3)

・よく話すようになった（1）

・プログラムには嫌がらずに参加しているから。(2)

・職員が本人に無理のない接し方をしてくれているから。

・子どもが唯一外出している場所で、母親以外の人と話しが出来、また、これからのことを相談出来るから。

・人との会話がとても苦手で、問いかけられると返事ができないが、最近は、映画の話しだと自分からよく話ができるようになって、嬉しく思う。

・本人の状態が安定しているため。

・週 1 回に回数を増やして欲しい。

＜わからない＞

・子どもから、話しが聞けないので分からない。(2)

②　「生活支援プログラムを開始して、本人の生活の中で変化を感じることがあったか」を、表 12 に示す。

表 12　「生活支援プログラムを開始して、本人の生活の中で変化を感じることがあったか」

＜生活面に関する変化＞

・自分から進んで早起きするようになった。

・いつもは朝昼逆転しているが、作業の前日は、少し早く寝るようになった。

・昨年の今頃は、発達障害者支援センターに行くことも大変で、いつも暗い顔をして不規則な生活をしていた。生活支援プログラムに参加するようになってからは、よく出かけるようになり、明るくなった。今では、楽しみにしているようだ。

・外出して他人と接するのはまだ無理だが、家族の前では、以前より自由に好きなことをするようになった。

＜コミュニケーションに関する変化＞

・作業を通して、本人が「これは早く出来たよ」と報告してくれる。話しをよくするよ

うになった。

＜意欲や自信に関する変化＞
・自分のことは自分でやろうとする意欲を感じる。
・少しは前向きなところが感じられる。
・褒められることで、少しずつ自信が持てるようになったようだ。

＜その他の変化＞
・自分の障害を少しずつ理解しようとしているように思える。
・自殺をほのめかしたり、突然いなくなるような大きな騒ぎを起こすことがなくなった。

・変化は殆ど気が付かない。(1)

③　「生活支援プログラムを開始して、ご家族のご本人に対する理解や対応について、変化を感じることがあるか。」については以下の通りである。

・先の事ばかり考えて焦っていたが、今はなるようにしかならないと、今を考えるようになった。(2)
・家族にプログラム参加を応援しようという気持ちがあり、本人もその気持ちを感じて、良い流れになってきているように思う。(3)
・出来るだけ干渉しないで、本人の判断で行動できるように心がけている。
・担当者との話により、本人の個性を一つずつ確認していくことができた。
・本人は、思うようにならないときに、大声を出したり、物に当たったりするので、家族が巻き込まれて大騒ぎになっていたが、段々接し方が分かり、トラブルが少なくなった。
・無回答（2）

④　「今後のご本人の生活や仕事についてどのような希望をもっているか」については、以下の通りである。

・本人の特性や得意な部分を生かせるような仕事を探していきたい。(3)
・現状を受け止め、身の丈に合った生活や仕事を認めること、更に自分の努力により人生を切り開いていくことができるようになることが目標である。
・いずれ親がいなくなるので、その時までに生活基盤ができるか、不安を持っている。
・一人で生活ができるようになれば安心である。そのために、本人に合った仕事があればいいと思う。
・まずは就労支援継続 B 型作業所に適応できる能力を身に着けることが目標である。
・障害福祉サービス事業所に、次年度から行くようになればよいと思っている。
・仕事に対する自信を全くなくしているので、少しずつ自信を持ち、少しずつ“働けるかもしれない”と思うようになってくれればと願っている。
・少しずつでも外（他人）に対応出来るようになればいいと思っている。
・活動を継続して、だんだん他の所へ行けるようになるといいと思う。プログラム参

加時も、一人で通えるようになればと思う。
・他の人に迷惑をかけることのないように、生活をしてくれればと望む。
・将来も、発達障害者支援センターに時折通わせてもらい、生活についてアドバイスして欲しい。

⑤　「生活支援プログラムについての要望」は、以下の通りである。

・今後の支援プランのようなものを考えてほしい。
・適応力を広げる為、出来るだけ多種多様の作業体験ができるように希望する。
・こだわりの意識を軽減できるような訓練作業があれば取り入れて欲しい。
・同じくらいの年齢の人と多く話す機会があればよいと思っている。
・本人の状態に応じて、レベルアップを行っていって欲しい。参加日に合わせて、本人に体調等の管理をさせたいと思う。
・特にない（3）
・無回答（2）

家族へのアンケート調査の結果から、10 人中 8 人は、生活支援プログラムに概ね満足しているが、2 人は、子どもと話しができないので、「わからない」と答えている。「本人の変化」については、生活面やコミュニケーション、意欲などの面で変化が挙げられていたが、「変化に気付かない」と答えた人も 1 人いた。「家族の変化」としては、家族の本人に対する姿勢や対応方法が変化した人が 4 人いた。また、3 人は、家族が本人に対し「応援する気持ちを抱いている」と答えている。「今後の本人の生活や仕事についての希望」については、本人や家族の状態により意見も様々であり、仕事や生活を自立してできることを願っている家族もいれば、「少しずつ自信を持ってほしい」と、願っている家族もいた。「生活支援プログラムへの要望」については、内容のレベルアップや支援プランの希望等があった。

４.「発達障害のあるご本人および家族のための就労支援研修会」のアンケート調査結果

研修会参加人数は 62 人、アンケート回収数は 58、アンケート回収率は 95%であった。アンケート回収者の内訳を、表 12 に示す

表 12　アンケート記入者の立場について

	本人 16-20 歳	本人 21-25 歳	本人 26～30 歳	本人 31～35 歳	本人 36～40 歳	家族	支援者	合計
人数	2	2	3	6	2	30	13	58

アンケートの結果について、　図１から図２に示す。

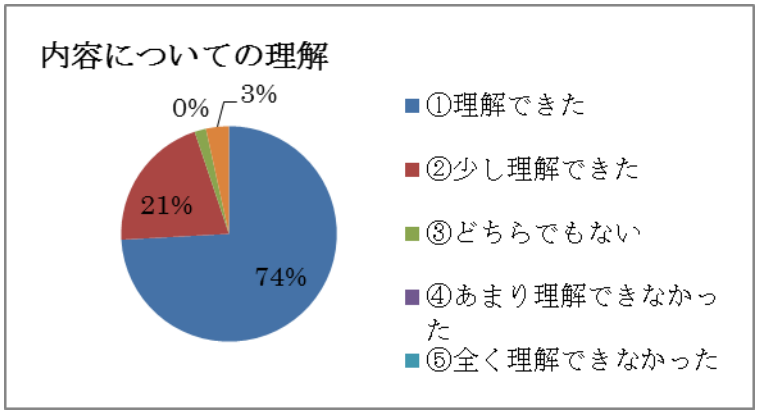


図１　「講義の内容について」の理解度

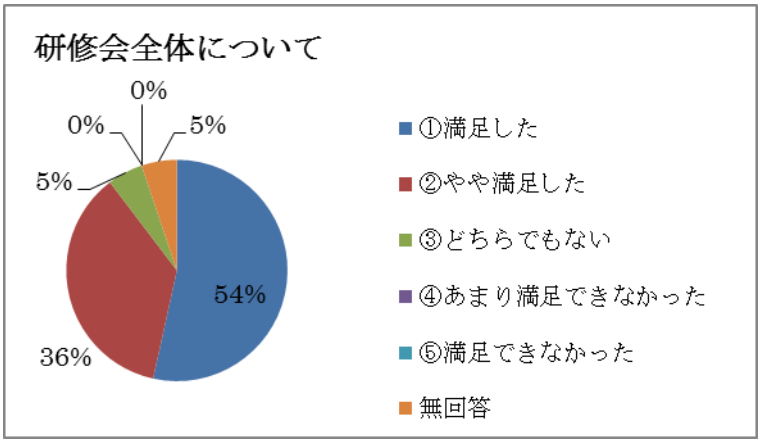


図２　「研修会全体を通して」の満足度

図１の「講義の内容について」理解できたか、の主な内容を以下に示す。

＜当事者の発表について＞

・自身の体験や気持ちの変化について話してくれた内容は、大変貴重だった(2)

・体験者の生の話に感動した。理解のある上司や会社があれば続けられると信じている。

・本人の背中を大きく押してくれたと思う。勇気をもって発表して下さり、感謝している。

＜講義について＞

・各種支援機関の役割やサービスの内容など、流れがまとめられて分かりやすかった。（2）

・自分で働いて、色々と聞いたりして考えていかないといけないと思った。まず生活面からしっかりしていかないとと思った。

・改めて気付かされる事があった。自分を知り、会社に配慮してもらいたいことをまとめたい。

・力強いサポート機関があることを知ったので、一つずつ進めていきたい。

図２の「研修会全体を通して」満足できたか、の主な内容を以下に示す。
＜当事者の発表について＞
・体験談が参考になった。（5）
・体験者の話がよかった。（2）
・支援を受け仕事をしている当事者の話を聞けたことが良かった。本人の心の動きが分かった。
＜講義について＞
・就労に向けて必要な事が、とても分かりやすかった。
・自分の障害を理解しないと、就職しても長続きしないと思った。
・今日の話を忘れないようにし、今後の就職活動に役立てたい。
・適材適所で働く場所があれば、きっと生きていけると思った。また、理解者や支援者を増やす取り組みが必要だと思った。
・もっと、発達障害の人が働くうえで考えないといけない事などのアイディア欲しい。

図１の結果から、講義の内容については、参加者の 85％が、概ね理解しており、図２の結果からは、90％が研修会に概ね満足していることが分かった。
参加案内は、生活支援プログラムの参加者全員と、つばさに相談がある高校生以上の本人、就労支援機関、相談機関等に行い、市政だよりによる募集も行った。生活支援プログラムに参加している本人（2 人）と保護者（2 人）の参加があり、参加した本人からは、「当事者発表がとてもよかった。自分も同じような経験をしたので、気持ちがよくわかった。」という感想が聞かれた。プログラム参加者の中には、大勢の人の中が苦手で会場に入れない人もいるため、必要としている参加者には個別に内容を伝達するなど、配慮を行う必要がある。

５.「障害福祉サービス事業所職員に対する実務研修会」のアンケート調査結果

研修会参加人数は 54 人、アンケート回収数は 45、アンケート回収率は 93％であった。アンケート記入者の内訳を、表 13 に示す。

表 13　参加者内訳について

	福祉サービス事業所							相談機関	その他	無回答	合計
	就労移行	就労継続A型	就労継続B型	自立訓練	生活介護	入所	その他				
人数	17	12	13	1	4	6	1	4	1	2	61

アンケートの結果について、図 3 から図 4 に示す。

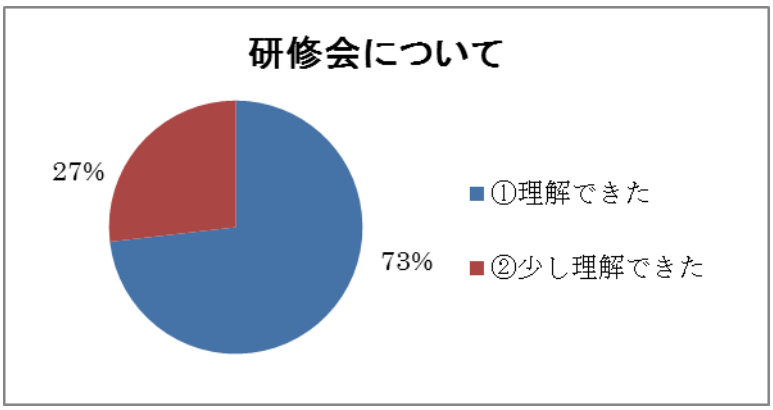


図 3　「講義の内容について」の理解度

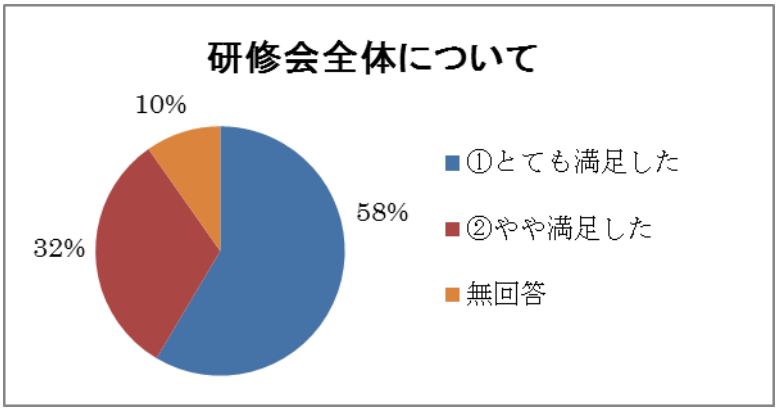


図 4　「研修会全体を通して」の満足度

図 3 の「講義の内容について」理解できたか、の主な内容を以下に示す。
・自分たちでもできる取り組みを見つけることができ、参考になった。（5）
・工夫されていることを、現場でも実践したいと思った。（3）
・すぐに利用できそうな取り組みが多く、悩んでいたことが講義で分かり勉強になった。
・とても勉強になった。様々な経験や情報を理解して、就労に向けての支援者の姿勢や考え方を学ぶことができた。就労継続支援施設でも、社会性やソフトスキル、ライフスキルについて支援していきたい。
・現在行っている取り組みを知ることができてよかった。当事者の方達へ伝えていき、自信が持てるようにしたい。

図 3 の結果から、講義の内容については、参加者の 100%が、概ね理解しており、図 2 の結果からは、90%が研修会に概ね満足していることが分かった。
講義は、写真やビデオなど、視覚的な情報が多く使われていたため、参加者

には具体的な支援の方法や、使用されている教材等の内容が分かりやすかったのではないかと想像される。アンケートには、「参考になった」や、「現場でも実践したい」などの意見が複数あった。また、参加者の中には、視覚障害者の事業所や救護施設職員なども含まれ、様々な機関において、発達障害者の具体的な支援方法についてのニーズがあることがわかった。

６．考察

生活支援プログラムは、平成 24 年度より実施しているが、長期にわたり在宅生活が続いた人が多いため、個々人の変化のためには長い期間を要しているが、この一年間の中でも、参加状態に変化が見られている。

参加者の一年間の主な変化を、表 14 に示す。

表 14　参加者の一年間の主な変化

	参加開始時期	今年度の状態（主な変化）
A	H26 年 4 月	フリースクールを卒業後、生活支援プログラムに参加する。障害福祉サービス事業所の体験も重ね、郵便局のアルバイトの採用試験に挑戦した。
B	H26 年 8 月	ごく限られた場所にしか行けない状態であるが、年度末に、発達障害者支援センターの担当者と障害福祉サービス事業所 2 カ所の見学に行くことが出来た。
C	H26 年 6 月	職員が尋ねても意思表示ができなかったが、頷いたり、アンケートを使用しての意思表示が出来るようになってきた。家族の前でも自由に振舞う事が増えてきた。
D	H24 年 7 月	意思表示が出来る場面が増えてきた。また、面談では自身の悩みを自分からよく話すようになった。H と合同での作業を月 1 回行い、少しずつ H の方を見ることが出来るようになってきている。
E	H24 年 4 月	前期の福祉サービス事業所体験後、8 月末より体験した施設を正式利用する。しかし、体調を崩したり、障害者と一緒に働くことに疑問を抱くようになり、事業所を辞めて、2 月に生活支援プログラムに戻る。
F	H24 年 8 月	6 月より、就労支援継続 B 型の事業所に通い始め、プログラム参加を終了する。定期的に発達障害者支援センターでの来所相談を行い、担当者が経過を確認しながら助言を行っている。
G	H24 年 8 月	昨年度から参加している当事者会に参加することが楽しみの一つになっている。対人緊張が強いが、昨年度体験利用した障害福祉サービス事業所に、今年度も前期、後期とも体験実習に行くことができた。
H	H24 年 6 月	障害福祉サービス事業所の体験を見合わせていたが、今年度後期の体験実習に 2 回参加することができ、次年度以降の参加にも意欲を見せている。D との合同作業では、D を気遣う場面も見られた。

I	H26 年 4 月	仕事の失敗体験などから、殆ど会話をすることがなくなっているが、プログラム参加時は、自分の好きな映画についての話しをするようになった。毎回、見た映画のチラシを持参する。
J	H24 年 4 月	6 月までは参加していたが、体調を崩し参加を中断する。
K	H26 年 6 月	在宅の期間が長くなり、家族との関係が悪くなっていたが、プログラムに参加することで、家族の理解が得られやすくなり、精神的な状態が安定する。自殺企図がなくなっている。
L	H25 年 8 月	昨年度から、1 年間中断していたが、本人の申し出によりプログラムを再開する。家族とのトラブルについて、興奮して大声で話すことがあったが、職員と話しをし、その後は落ち着いて参加している。作業だけでなく、職員と家やアニメのことなどを話したいと希望する。
M	H26 年 10 月	5 年ほどひきこもっていたが、今年度より生活支援プログラムに参加する。決まった場所に通うことが苦手ということで、無理のないペースで月 1 回実施する。パソコン作業を行っており、習得したスキルで、家庭で家計簿を作成する。

今年度、障害福祉サービス事業所の利用を開始した人は 2 名であったが、他の参加者と合同での作業を継続できるようになった人や、つばさで行なっている当事者会に安定して参加できるようになった人などがおり、プログラム参加を中断した 1 名以外は、少しずつであるが良い方向に変化していると言える。S-M 社会生活能力検査の結果でも、身辺自立、移動、作業、集団参加、自己統制において僅かに数値が上がっている者が 4 名おり、プログラムに参加することで、「慣れた所であれば、自分で出かけるようになった」や、「服装に気を付けるようになった」などの変化が見られた。行動記録からは、対人・コミュニケーションに関するよい変化が最も多かったことが分かり、頷きなどで少し意思表示や挨拶が出来るようになった緘黙の参加者や、作業中の報告や質問などが少しずつ出来るようになってきた参加者がいた。自身の家庭での悩みや興味関心に関することを、自分からよく話すようになった人もおり、生活支援プログラムが安心してコミュニケーションできる場所になっているのではないかと考えられる。また、個別面談の中では気づきにくい本人の特性について、作業を通して、自身のこだわりやすいところに気付いたり、どのような作業が好きかに気付いた人もいた。

本人へのアンケート調査の結果からも、参加者は、対人・コミュニケーション面での変化を望み参加している人が多いことがわかり、自身の変化についても、コミュニケーション面での変化や「外出が出来やすくなった」ことなどを挙げている人が多いことが分かった。活動内容については、4 名が「満足でも、不満でもない」と答えており、中にはもう少しレベルの高いことがしてみたいという意見もあった。活動については、可能な限り、個人の興味

関心や特性に応じた内容を検討しているが、発達障害者支援センター内では、提供できる作業が限られる。また、参加者にとっては、事業所の利用が明確な目標としてあまり意識されていないことが分かり、今後の実施にあたっては、プログラム参加における個別の目標を明確に伝えていくことも必要と考えられる。

家族へのアンケート調査の結果からは、「生活支援プログラムの内容に満足しているか」については、「子どもが話をしないのでわからない」と答えた2名以外は、全員「満足している」ということであった。「本人の生活の中で変化」については、本人へのアンケート調査結果と同様に、「外出することが増えた」ことや、「よく話すようになった」などのコミュニケーション面での変化を挙げた回答が多く、その他、“自信”や“意欲”面で変化を感じているという回答もあった。家族の変化については、家族が焦らず待つようになったと答えた人が3名おり、その他、家庭内でのトラブルが減ったり、家族が本人を応援する環境が出来たという回答もあった。「今後の本人の生活や仕事についての希望」については、本人同様、長期的な目標を記入している保護者と、少し先に出来そうなことを答えている保護者がおり、また、「生活支援プログラムについての要望」としては、「色々な作業体験をさせて欲しい」や、「同じくらいの年齢の人と話す機会を作って欲しい。」など、次のステップを望む意見があることが分かった。

生活支援プログラムの参加者は、学校や職場での失敗経験などから、不安や対人緊張が強く、長期にわたる在宅生活を送ってきた人がほとんどである。自分自身のことを伝えることも難しい人が多く、発達障害者支援センターに相談に来ても、何を話せばよいかわからず、結局来所できなくなってしまうケースも少なくない。生活支援プログラムで行っている、職員とマンツーマンでの作業は、発達障害者が苦手とする、会話でのコミュニケーションを要求されないことや、視覚的な作業提示などが、参加しやすく、継続できやすい理由の一つになっていると考えられる。また、所属がないことで、家庭の中でも肩身が狭い思いをしてきた人にとっては、安心して通うことが出来る場所があることが、社会の接点となり、本人だけでなく、家族の安心に繋がっていると考えられる。その結果、家族との関係がよくなって、問題行動が減少しているケースもあった。

アンケート調査の中には、“就職”や“家族からの自立”といった本人や家族の焦る気持ちも見受けられるため、個々人の状態に合わせた無理のない支援を行いながら、本人、家族と、現在の目標の明確化や、共有のための作業を行っていくことも、今後の課題である。また、障害福祉サービス事業所等の利用に向けては、発達障害者支援センターの職員がつかなくても安心して作業ができるよう、個々人に合わせた手順書やマニュアル、リマインダーなどの視覚支援ツールを今後、積極的に使用していくことも必要であると考える。

「発達障害のあるご本人および家族のための就労支援研修会」については、平成 25 年度より実施しており、今年度は新たに 1 名の当事者に体験発表をしてもらった。当事者、家族の参加以外にも、若者サポートステーション（3 人）や障害者基幹相談支援センター、医療機関からの参加もあった。講義は、地域で実際に支援している障害者しごとサポートセンターの職員による話しであったため、地域の実情も踏まえた話が聞けたことが良かったのではないかと考えられる。“色々な資源やサービスがあることは知っているが、どのような違いがあるのかよく判らない”という話は発達障害者支援センターの相談の中でも聞かれるが、アンケート結果からは、個々人にあった様々な働き方や段階があることや、就労に向けて自身の特性の理解等が重要であることが理解されたようである。また、当事者の発表が「よかった」、「参考になった」という意見や、「もっと体験者の話が聞きたい」という意見が複数あったため、今後も障害者しごとサポートセンターに協力依頼しながら内容を検討していく。

障害福祉サービス事業所に対する実務研修会は、市内の成人期の発達障害者を対象とした障害者福祉サービス事業所や、若者サポートステーション、ひきこもり支援センターに対して案内を送付し、24 カ所の事業所からの参加があった。講義では、発達障害（主には高機能の発達障害）に特化した就労支援について、写真やビデオを使用した説明があり、参加者は具体的な支援方法について学ぶことが出来たと考えられる。感想には、「参考になった」や、「学んだことを現場で実践していきたい。」という感想が複数あった。市内には、高機能の発達障害の人を受け入れている施設は多数あるが、発達障害に特化した事業所は、就労移行支援事業所が 1 カ所あるのみで、対応がうまくいかず、状態が悪くなったり、通所が継続しないケースも多い。高機能の発達障害者への対応は、個々人によって必要な支援も違い、本人の特性に応じた様々な支援技術が求められるため、発達障害者支援センターの役割として、今後も実務研修会などを行ない、支援技術の向上に努めていく必要がある。また、当日は、生活支援プログラムについての事業説明を行なった。地域には、所属がなく在宅生活を送っている発達障害者が多数いると考えられ、本プログラムに対するニーズはあると考えられるが、発達障害者支援センターのマンパワーや設備だけでは担っていけない。今後も、プログラムの内容の見直しや効果についての検証を行い、障害福祉サービス事業所、障害者しごとサポートセンター、若者サポートステーション等との連携についても可能性を検討していきたい。

資料１－２

平成 26 年 4 月 23 日

「成人期生活支援プログラム対象者の障害福祉サービス事業所体験利用」について

1　目　的

生活支援プログラムに継続して参加している方の中で、就労に向けての次の段階として障害福祉サービス事業所の利用が望まれる方を対象に実施する。地域の障害福祉サービス事業所へ「つばさ」スタッフが同行し、そこでの作業経験を通して自信をつけてもらうとともに、利用につなげていく。

2　方法

生活支援プログラム参加者と「つばさ」職員で障害福祉サービス事業所を訪問し、作業体験をする。下記のⅠ期とⅡ期の期間内に実施し、参加者の状態と作業所の状況に合わせて無理のないように、場所や参加時間を設定する。可能な場合は単独での利用に向けて調整を行っていく。

事業所の選定は、プログラム参加者が将来的に利用可能な事業所所（居住地や作業種、事業形態などから）を選定し、個別に受け入れ依頼を行なっていく。受け入れの了解が得られた福祉サービス事業所には、体験実習謝礼金（1 回につき 2 千円）を支払う。

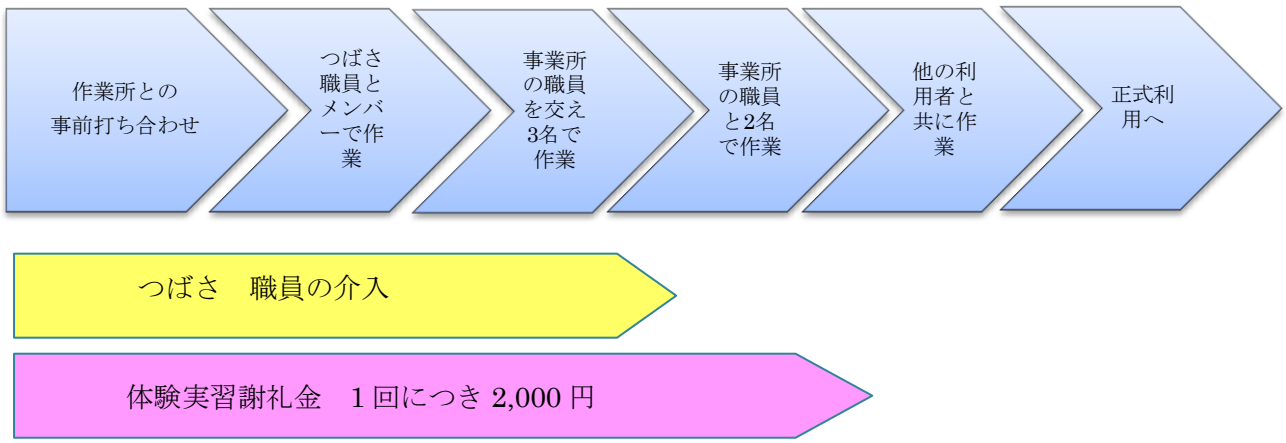
3　実施期間

①　前期　平成 26 年 6 月 1 日～平成 26 年 7 月 31 日

②　後期　平成 26 年 10 月 1 日～平成 26 年 11 月 30 日

＜体験利用のイメージと協力謝礼金の発生期間について＞

（例）



本人対象

資料１－３

氏名　（　　）

成人期の生活支援プログラム（施設体験利用を含む）　アンケート兼インタビュー

１　生活支援プログラムに参加している理由は何ですか。（複数回答可）
ア　日中活動の場が欲しいから。
イ　家族以外の人との関わりをもちたいから。
ウ　作業（仕事）のスキルを身につけたいから。
エ　コミュニケーションの練習をしたいから。
オ　福祉サービス事業所等の利用の準備がしたいから。
カ　参加を勧められたから。
キ　わからない。
ク　その他
（　　）

２　活動には慣れましたか。
ア　慣れた　　イ　少し慣れた　　ウ　変わらない　　エ　慣れない
オ　負担になっている　　カ　わからない
その理由
（　　）

３　生活支援プログラムの内容に満足していますか。
ア　満足である　　イ　少し満足である　　ウ　ふつう　　エ　少し不満である
オ　不満である　　カ　わからない
その理由
（　　）

４　生活支援プログラムを開始して、自分自身の理解についてや、生活の中で何か変化を感じることがありましたか。
（　　）

５　今後の生活や仕事についてどのような希望をお持ちですか。
（　　）

６　生活支援プログラムについての要望はありますか。
（　　）

家族対象

資料１－４

平成 26 年度「成人期の生活支援プログラム」についてのアンケート

１　記入の方のお名前

（　　）

２　生活支援プログラムの内容に満足していますか。

ア　満足である　　イ　少し満足である　　ウ　ふつう　　エ　少し不満である

オ　不満である　　カ　わからない

その理由

（　　）

３　生活支援プログラムを開始して、ご本人の生活の中で変化を感じることがありましたらご記入ください。

（　　）

４　生活支援プログラムを開始して、ご家族のご本人に対する理解や対応について、変化を感じることがありましたら、ご記入ください。

（　　）

５　今後のご本人の生活や仕事についてどのような希望をお持ちですか。

（　　）

６　生活支援プログラム全体についての要望があれば教えてください。

（　　）

ご協力ありがとうございました。

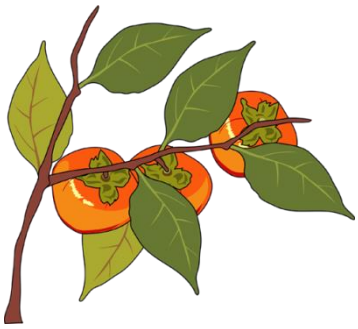
資料１－５

北九州市
北九州市発達障害者支援センター 「つばさ」 主催

平成 26 年度「発達障害者の就労支援について」
～働くために必要なこと～

本研修会は、発達障害のある方やそのご家族に、就労支援の現状について知っていただき、ひとりひとりにあった働き方を考えたり、就労までに身につけておいた方が良いことなどを学んでいただく場として、昨年度より開催しております。実際に多くの就労支援をされてきた、北九州市しごとサポートセンターの長田氏より、北九州の実情も踏まえてお話しいただきます。今年度は、地域で就労されている発達障害の当事者の方に、体験も話していただく予定です。ぜひこの機会にご参加ください。ご本人・ご家族向けの研修会ですが、支援者の参加もお待ちしております。

日　　時 ： 平成26年12月14日（日）
受付開始　9:00～　研修会　9:30～　12:00
場　　所 ： ウェルとばた　2 階　多目的ホール
講　　師 ： 北九州障害者しごとサポートセンター副所長　長田　雅行　氏
発達障害の当事者　（体験発表）
参 加 費 ： 無　料
定　　員 ： 120名
対 象 者 ： 北九州市内にお住まいの、発達障害のご本人（高校生以上）、ご家族、及び支援者。
申込方法 ： 裏面の「申込書」にご記入の上 FAX でお送りいただくか、「申込書」の内容を往復はがきか「E-mail」に記入いただき、お送りください。
申込締切 ： 11月14日（金）必着
※　申込多数の場合は抽選となります。11月28日（金）までに参加可否の連絡がない場合は、大変お手数ですが下記連絡先までお問い合わせください。



北九州市発達障害者支援センター「つばさ」
〒805－0019
北九州市小倉南区春ヶ丘10－2
TEL/FAX：093-922-5523
E-mail：kitakyu.tsubasa@jcom.home.ne.jp

資料１－６

「発達障害者の就労支援について」～働くために必要なこと～
アンケート

（平成 26 年 12 月 14 日）

※今後のセミナーの参考とさせていただきますので、アンケートのご協力をお願いします。
該当する項目に〇をつけて、終了時にご提出ください。

・該当するものに〇をつけてください。

①本人（　　歳）　②家族　③支援者

１．今回の研修会はどちらでお知りになりましたか。

①市政だより　②つばさからの案内　③つばさのホームページ
④知人の紹介　⑤その他（　　）

２．研修の日程や時間について
（　①適当である　②適当でない　③どちらでもない　）
※その理由について、ご意見などありましたら、ご記入ください。

3．研修の会場について
（　①適当である　②適当でない　③どちらでもない　）
※その理由について、ご意見などありましたら、ご記入ください。

4．講義の内容について
（　①理解出来た　②少し理解できた　③どちらでもない　④あまり理解できなかった
⑤理解できなかった　）
※ご意見・ご感想等ありましたら、ご記入ください。

5．研修会全体を通して
（　①とても満足　②やや満足　③どちらでもない　④あまり満足できなかった
⑤満足できなかった　）

6．その他、研修会の感想や今後受けてみたい講義内容がございましたらご記入ください。

ご協力ありがとうございました。

資料１－７

北九州市

北九州市発達障害者支援センター「つばさ」主催

障害福祉サービス事業所職員対象　発達障害者支援のための実務研修会

～「ジョブジョイントおおさか」の取り組みに学ぶ～

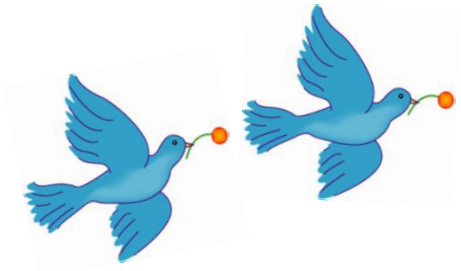
アスペルガー症候群や高機能自閉症などの発達障害の方たちが、就労に向けて、障害福祉サービス事業所を利用する機会は年々増えています。しかし、高機能の発達障害の方たちに対する有効な支援方法は確立しているとはいえず、事業所の皆さまは、手探りで支援しておられるのではないでしょうか。本研修会では、発達障害に特化した支援を先進的に行っている、就労支援機関「ジョブジョイントおおさか」の取り組みや事例を紹介していただきます。この機会にぜひご参加いただき、発達障害のある方の理解や今後の支援の参考にしていたければと思います。

講師　**社会福祉法人　北摂杉の子会　「ジョブジョイントおおさか」**
所長　星明　聡志　氏

「ジョブジョイントおおさか」

「ジョブジョイントおおさか」は、自閉症・発達障害のある人に特化した就労支援を行なっている障害福祉サービス事業所で、「就労移行支援」と「自立訓練」の事業を行なっています。ひとりひとりの才能や興味関心を活かしながら、できるだけ自立して働くことができるよう、様々なプログラムを組んで支援をされています。また、コミュニケーションに苦手さをもつ学生のための就労支援プログラム「en+joint クラブ」にも取り組まれています。

日　　時 ： 平成 27 年 3 月 15 日（日）　10 時～12 時 30 分（受付開始は 9 時 30 分）
会　　場 ： 総合保健福祉センター　アシスト 21　2 階講堂
　　北九州市小倉北区馬借 1 丁目 7 番 1 号
対　　象 ： 発達障害者の支援を行っている障害福祉サービス事業所や相談機関の職員
内　　容 ： 講義
定　　員 ： 80 名
参 加 費 ： 無料
申込方法 ： 参加申込書に記入し、FAX または E-mail で下記連絡先までお申込みください。
申込締切 ： 2 月 23 日（月）必着
※申込者多数の場合は抽選となります。抽選に外れた方には 2 月 25 日（水）までに連絡致します。



連絡先　**北九州市発達障害者支援センター「つばさ」**
〒802－0803
北九州市小倉南区春ヶ丘10－2
TEL／FAX　０９３－９２２－５５２３
E-mail ： kitakyu.tsubasa@jcom.home.ne.jp

資料１－８

「発達障害者支援のための実務研修会
～「ジョブジョイントおおさか」の取り組みに学ぶ～

アンケート

（平成 27 年３月 15 日）

※今後の参考とさせていただきますので、アンケートのご協力をお願いします。

・所属先に該当するものに〇をつけてください。
福祉サービス事業所　［　①就労移行　②就労継続支援Ａ型　③就労継続支援Ｂ型　④自立訓練
⑤生活介護　⑥入所施設　⑦その他　］　⑧相談機関　⑨その他（　　）

１．今回の研修会はどちらでお知りになりましたか。

①　勤務先での案内　②　つばさのホームページ　③　知人の紹介　④　その他（　　）

２．研修の日程や時間について

①　適当である　②　適当でない　③　どちらでもない

※その理由について、ご意見等ございましたらご記入ください。

3．研修の会場について

①　適当である　②　適当でない　③　どちらでもない

※その理由について、ご意見等ございましたらご記入ください。

4．講義の内容について

①　理解出来た　②　少し理解できた　③　どちらでもない　④　あまり理解できなかった　⑤　理解できなかった

※ご意見・ご感想等ございましたらご記入ください。

5．研修会全体を通して

①　とても満足　②　やや満足　③　どちらでもない　④　あまり満足できなかった　⑤　満足できなかった

6．今後受けてみたい講義内容や講師のご希望等がございましたらご記入ください。

ご協力ありがとうございました。

資料２－１

平成 26 年度　北九州市発達障害者支援モデル事業報告書

行動障害の予防における効果的な支援手法の開発

Ⅰ．事業要旨

このプログラムの目的は、行動障害がある自閉症の方に対して効果的な支援を実施している市内の福祉サービス事業所の取り組みを、市内の福祉サービス事業所や特別支援学校職員が学び、各現場に取り入れることによって、行動障害や二次障害を予防することである。そこで、市内の三つの事業所に依頼し、実践報告及びパネルディスカッションを行った。研修会申し込みは 84 名、当日参加は 69 名であった。研修会当日と３ケ月後の事後アンケート調査を行い、この研修会で学んだ内容を、どのように各現場に取り入れているか測定した。研修会直後のアンケート回収数は 65 であり、回収率は 94％であった。実践報告の取り組みについて、97％が「参考になった」、82％が「現場に取り入れてみようと思う」と回答している。３ケ月後の事後アンケート調査は、配布数 69、回収数 35、回収率 51％であった。その結果、学校や事業所の中で「取り組んだ」が 17％、「少し取り組んだ」が 17％あり、回答者の 34％がこの研修会後に、参考になった取り組みを実施していることが分かった。実際に取り入れている内容は、「利用者への直接支援」としては、「構造化」「視覚的支援」「シンプルに伝える」「褒める」「利用者の強みに着目する」「成功体験を増やす」「個人に合った支援の工夫」等であった。「職員体制」では、「丁寧なアセスメントを基に目標設定をする」ことや「職員の意識の向上」等があった。「その他」として、「家族との交換ノート」の取り組みや実践発表した事業所へ見学したことが分かった。

回答者の 61％が研修会で学んだ内容をあまり実践しておらず、その理由として、今回の実践報告の事例と回答者の現場が異なっていることや、物理的・人的な環境調整が難しいこと、職員の知識不足や未経験等があがっていた。事後アンケート調査結果では、このような実践的な研修会を望む声が多くあったため、今後も研修会を継続することが必要である。また、研修会に参加した一部の職員だけが事業所で取り組むことは限界があるため、職員全体が共通認識を持つためにも、発達障害者支援センターの役割として、福祉サービス事業所に対する機関コンサルテーションを強化したい。

Ⅱ．事業目的

行動障害がある自閉症の方に対して効果的な支援を実施している市内の福祉サービス事業所の取り組みを、市内の教育関係者及び福祉サービス事業所職員対象に研修会を開催し、報告する。成人期の参考になる事例を知り、支援手法を現

場に取り入れることによって、行動障害や二次障害を予防することを目的とする。

Ⅲ．事業の実施内容

年度当初は市内の４つの知的障害の特別支援学校教員全員を対象として、行動障害の方たちに対して効果的な支援を行っている福祉サービス事業所の実践報告を行う予定であったが、年度途中からの研修計画依頼は難しかった。そのため今年度は、市内の特別支援学校・特別支援学級・福祉サービス事業所の職員対象に研修会を実施することとした。平成 26 年 10 月 26 日（日）に、３つの福祉サービス事業所の実践報告及びパネルディスカッションを行った。（資料 2-1）

効果検証に関しては、研修会当日（資料 2-2）と数か月後（資料 2-3）にアンケート調査を実施した。

Ⅳ．分析、考察

１．アンケート調査結果

①　研修会当日のアンケート調査結果

研修会参加者に研修終了直後、記入してもらった。研修会参加人数は 69 名、アンケート回収数は 65、アンケート回収率は 94％であった。

アンケート回答者の所属機関の内訳を、表１に示す。

表１　所属機関についてお尋ねします

	特別支援学校（小学部）	特別支援学校（中学部）	特別支援学校（高等部）	特別支援学校（その他）	福祉サービス事業所	その他	合計
人数	0	1	1	1	59	3	65

アンケートの結果について、図１から図３に示す。

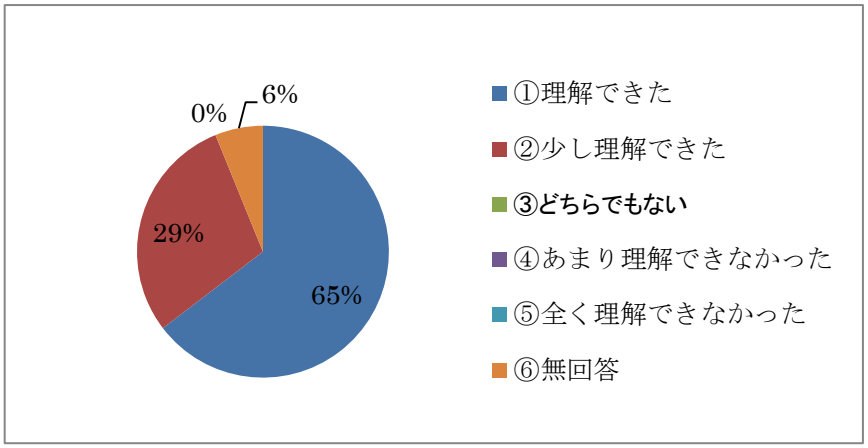


図１「今日の研修会はいかがでしたか」について

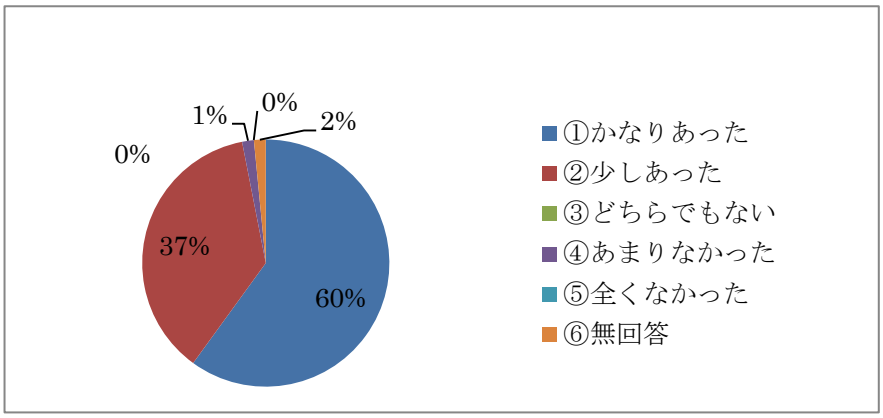


図２「実践報告の中で、参考になった取り組みはありましたか」について

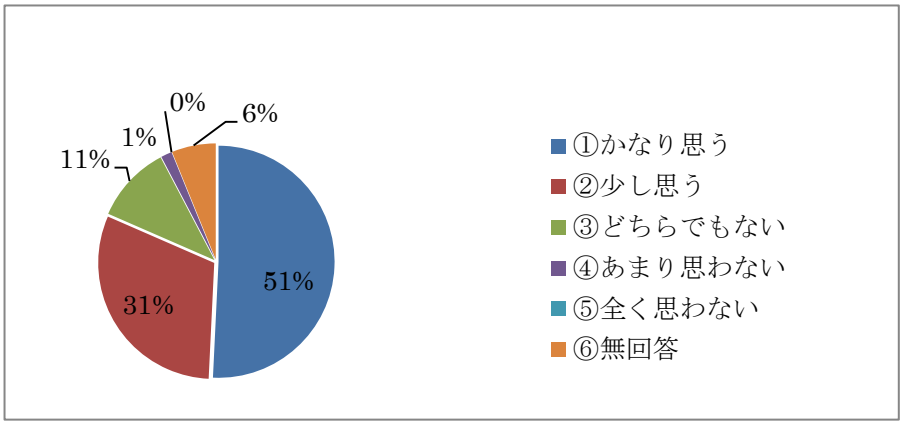


図３「今回の成人期の実践を、学校や事業所に取り入れようと思いますか」について

図２の「実践報告の中で、参考になった取り組みはありましたか」の主な具体的な内容を以下に示す。

＜参考になった取り組み＞

・選択肢を用意して、本人に決定してもらうこと、自己選択、自己決定の大切さ。（５）

・「課題となる行動」と「強みと可能性に着目」したアプローチの両面のバランスが大切であること。（３）

・本人の強みを生かしての、成功体験。（４）

・相談できる安心感をもってもらうこと。

・認められる場所作り。（２）

・個別支援計画書は意見を書いた紙を貼りだし、みんなで作成していること。（11）

・関係機関が連携した支援体制が大切ということ。（５）

・コミュメモの使用。（６）

・エントリーシート。（４）

・本人の年齢に関係なく、本人をよく見てどこにアプローチするか見つ

けること。
・問題行動（課題となる行動）への、対処方法。
・視覚的支援での、明確な伝え方。（４）
・隙間の時間について、事前に対策を本人と考えていること。
・構造化がしっかり行われているところ。（２）
・ABC 分析や TEACCH、PECS。
・ソーシャルストーリー。（３）

図３「今回の成人期の実践を、学校や事業所に取り入れようと思いますか」の主な具体的な内容を以下に示す。
・関係機関との連携やケース会議。（４）
・支援計画の作成を、細かくチームとして考えていく。（４）
・個別支援計画書は意見を書いた紙を貼りだし、みんなで作成していること。（５）
・職員の情報共有をしっかりして、同じ方向に向かって支援する。（５）
・「目標設定時のＢＳ手法」「２つのアプローチ」
・ニーズを通しつつ、本人との意思疎通を通して、表出的な表現が行えることが必要と感じる。
・利用者の強みを伸ばす支援。（４）
・利用者本人だけではなく、その背景（今までの体験、家族関係）を分かった上で行える支援を、共有して行う。
・自己選択、自己決定の場を増やしていくこと。（７）
・スケジュールを１日だけではなく、長い期間の提示もすること。（２）
・計画をしっかり練り、順序立てて利用者にきちんと伝えられる仕組み。
・コミュメモ。（３）
・交換ノート。
・エントリーシート。（２）
・構造化。（３）
・ソーシャルストーリー。（３）
・自閉症の特性を生かした徹底的な視覚支援。（２）
・文で書き、聞いたり、理解したりしてもらう。（４）
・他害行為の時などのデータ記録の大切さ。（３）
・課題となる行動へのアプローチの仕方。（３）

図１の結果から、65％が研修内容は「理解できた」、29％が「少し理解できた」と回答しており、94％の回答者が発表内容は概ね理解できたことが分かった。

図２の結果から、60％が参考になった取り組みが「かなりあった」、37％が「少しあった」と回答しているため、発表者以外の福祉サービス事業所や

特別支援学校で取り組むことができる内容があることが分かった。

図３の結果から、発表者の実践を自分の現場の中に取り入れようと、「かなり思う」が 51%、「少し思う」が 31%であったため、82%が発表内容の手法を自分の現場に取り入れようと考えていることが分かった。その一方で、「どちらでもない」が 11%、「あまり思わない」が１%であった。「どちらでもない」と回答した参加者が直接支援に携わっていない場合もあったが、発表内容が「理解できた」「参考になった」と回答しているものの、自分の現場への取り入れは「どちらでもない」のは、今回の事例が自分の現場とかなり異なるのか、現場への取り入れ方が分からないのか等分析が必要である。

②　研修会から３ケ月後のアンケート調査結果

研修会から３ケ月後の平成 27 年１月下旬に、研修会参加者全員にアンケート調査票を送付した。アンケート調査機関は、平成 27 年１月 20 日から２月 13 日である。アンケート配布数 69、回収数 35 であり、回収率 51%であった。回収率が高いとはいえなかったため、参加者全員に再度依頼文を送り、アンケート締め切り日を３月 10 日まで延長したが、その後の回答はなかった。

アンケート回答者の所属機関の内訳を、表２に示す。

表２　所属機関について

	特別支援学校	福祉サービス事業所	その他	無回答	合計
人数	2	29	3	1	35

アンケートの結果について、図４に示す。

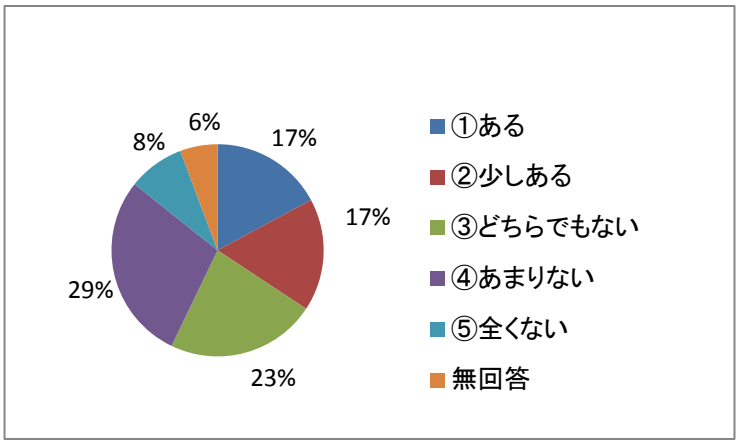


図４　前回の研修会を参考にして、学校や事業所の中で取り組んだ内容がありますか。

図４の結果から、学校や事業所の中で「取り組んだ」が 17%、「少し取

り組んだ」が 17%あり、回答者の 34%の参者が、この研修会後に参考になった取り組みを実施していることが分かった。その具体的な取り組みの内容を以下に示す。

＜学校や事業所の中で取り組んだ内容が「ある・少しある」の回答者の主な内容＞

・主に経験のない支援員が、新しく自立課題を作成した。研修で学んだ事を活かし、作成手順のアドバイスをした。
・今ある事業の作業に当てはめるのではなく、利用者ごとにその人に合った作業を出来るだけ探して、やりがいや達成感を感じられるように、今まで以上に準備や手順を工夫している。
・自信のない利用者に対して、多くの機会を作り成功体験を繰り返すことで、目標に近づけるようにしている。
・スケジュール管理を徹底するために、家族にも協力を依頼し、交換ノート（スケジュールチェックリスト）を行っている。
・担当の利用者で就労が難しい方のため、進路先として桑の実工房を見学させてもらった。
・今までは一緒に行って見て覚えてもらおうとしたり、口頭もしくは文章での指示・指導を行っていたが、この研修で学んだ、その人のレベルよりも１つ下に下ろして、必ず出来る方法を考えていけるようになった。指示書にも、短文や写真を入れる工夫ができるようになった。
・当事業者が発表させていただいたので、継続している。本人の強み、長所にアプローチしていくことを改めて必要だと感じ、意識して支援している。
・個人個人にあった支援の方法を色々試しながら、よい方法を見つけ出すようにしている。
・個別構造化の工夫と実践。
・より掘り下げて、すべてのツールを使うよう努力していく気持ちに職員全体がなった。
・ニーズアセスメントをしっかりと引き出し、本人の本質をまとめや整理をしていく中で目標設定を提示している。本人が楽しく生活や仕事ができるように、本人に合わせた構造化やツール使い、支援している。
・自閉症と診断されていなくても、統合失調症で自閉気味と思われる相談者がいる。視覚に訴える、伝えるときはシンプルに、出来たことを褒めるなどに試みている。

図４の結果から、学校や事業所の中で取り組んだ内容が、「どちらでもない」が 23%、「あまりない」が 29%、「全くない」が９%であり、回答者の 61%であった。その具体的な理由を以下に示す。

＜学校や事業所の中で取り組んだ内容が「どちらでもない・あまりない・全くない」の回答者の主な内容＞

・取り入れる前の段階として、利用者の行動のベースがまだ取れていない。

・対象者が事例とは異なるため合わないと思った。しかし取り組みは参考になったので、応用したい。

・対象者が重症心身障害者のため、取り入れることが難しかった。問題や課題に向けてのブレインストーミングやチームアプローチの手法は今後取り入れていきたい。（２）

・発達障害の方への支援に直接関わっていないため（２）。

・職員全員で個別支援会議に 33 週間かけるほどの手間は、在学時間が限られているので全く同様には無理だが、そのスタンスには大いに学ぶ所があると感じた。

・支援員数が多いため、支援を統一する事が難しい。

・個人的に有意義な研修だったが、事業所に持ち帰り、提案や取り入れてもらう環境が整わなかった。より多くの支援者と共に研修に参加し、意識を持ち共有する大切さを感じた。

・研修は大いに参考になったが、持ち帰って実施するには、具体的な支援内容がもう少しあればと感じた。また、皆が同じ思いで支援が出来るよう、全職員への指導（学習）をする必要があると思った。

・自閉症の支援に対して、知識が少ないため、今後出来ることがあれば取り入れたい。

・当事者が頑なに拒む事が多く、支援の難しさを感じた。

また、事後アンケート調査の項目「今後希望する研修や講師がありましたらお書きください」の主な記述を以下に示す。

・初歩的な発達障害領域の研修。

・知的な遅れのない発達障害の成人の就労支援や生活支援に関する研修。

・統合失調症と発達障害を併せ持つ人への支援について。

・事例発表や取り組み内容も参考になったので、継続してほしい。（２）

・他施設と情報交換が出来る研修。

・作業分析と手順書、行動分析について。

＜その他＞

・この研修だけでなく、何回かの研修に参加した職員は、通所者への対応が少しずつ変わったように思う。

・時間が短いように感じた。

・具体例が非常に多く、実践的な研修だった。また参加したい。

研修会の事後アンケート調査結果から、研修会での実践報告を参考にして、自分の現場で実践していたのは回答者の 34％であり、高い数値とはいえな

い。しかし、この研修会に参加することによって、アセスメントの重要性を認識したり、より個別的で本人に合った支援の工夫や、家族との協力体制を強化する等の実践の回答があった。また、あまり実践していないという回答者であっても、今後取り入れていきたいという意見も複数あった。また、あまり実践していない理由として、今回の実践報告の事例と回答者の現場が異なっている場合や、物理的・人的な環境調整が難しいこと、職員の知識不足や未経験等があがっていた。

２．考察

表３は、研修会当日アンケート調査項目「今回の成人期の実践を、学校や事業所に取り入れようと思いますか」の具体的な内容と、事後アンケート調査項目で、学校や事業所の中で取り組んだ内容が「ある・少しある」の回答者の主な内容を「本人への直接支援」「職員体制」「その他」にまとめたものである。

表３　実践報告を参考にして自分の現場に取り入れる内容

	当日アンケート	事後アンケート
本人への直接支援	・本人との意思疎通を通して、表出的な表現が行えるようにする。 ・利用者の強みを伸ばす支援。 ・自己選択、自己決定の場を増やしていく。 ・スケジュールを１日だけではなく、長い期間の提示もすること。 ・コミュメモ ・交換ノート ・エントリーシート ・構造化 ・ソーシャルストーリー ・課題となる行動へのアプローチの仕方。	・今ある事業所の作業に当てはめるのではなく、利用者に合った作業を出来るだけ探して、やりがいや達成感を感じられるように、今まで以上に準備や手順を工夫している。 ・自信のない利用者に対して、多くの機会を作り成功体験を繰り返すことで、目標に近づけるようにしている ・この研修で学んだ、その人のレベルよりも１つ下に下ろして、必ず出来る方法を考えていけるようになった。指示書にも、短文や写真を入れる工夫ができるようになった。 ・本人の強み、長所にアプローチしていくことを改めて必要だと感じ、意識して支援している。 ・個人個人にあった支援の方法を色々試しながら、よい方法を見つけ出すようにしている。 ・個別構造化の工夫と実践。 ・自閉症と診断されていなくても、統合失調症で自閉気味と思われる相談者がいる。視覚に訴える、伝えるときはシン

		プルに、出来たことを褒めるなどを試みている。
職員体制	・ケース会議 ・支援計画の作成を、細かくチームとして考える。 ・個別支援計画書は、皆で意見を書いた紙を貼りだして作成する。 ・計画をしっかり練り、順序立てて利用者にきちんと伝えられる仕組み。 ・他害行為の時などのデータ記録の大切さ。	・経験のない支援員が作成した自立課題に、研修で学んだ事を活かし、作成手順のアドバイスをした。 ・職員全員が、より掘り下げて、すべてのツールを使うよう努力していく気持ちになった。 ・ニーズアセスメントをしっかりと引き出し、本人の本質をまとめや整理をしていく中で目標設定を提示している。
その他	・関係機関との連携 ・家族関係や本人の今までの体験を理解した上で行える支援を共有する。	・スケジュール管理を徹底するために、家族にも協力を依頼し、交換ノート（スケジュールチェックリスト）を行っている。 ・就労が難しい利用者の進路先として発表事業所を見学した。

表３の結果から、自分の現場に取り入れたい内容の「本人への直接支援」は、当日アンケート調査では、「構造化」「自己選択・自己決定の場」「コミュメモ」「エントリーシート」「利用者の強みを伸ばす支援」「行動へのアプローチ」等であった。事後アンケート調査で実際に取り入れている内容は、「構造化」「視覚的支援」「シンプルに伝える」「褒める」「利用者の強みに着目する」「成功体験を増やす」「個人に合った支援の工夫」等であった。

自分の現場に取り入れたい内容の「職員体制」は、当日アンケート調査では、「個別支援計画は皆で意見を書いた紙を貼りだして作成する」「データ記録の大切さ」等であり、事後アンケート調査では、「丁寧なアセスメントを基に目標設定をする」ことや「職員の意識の向上」等があった。

自分の現場に取り入れたい内容の「その他」として、当日アンケート調査は、「関係機関との連携」や「本人の背景に対する理解」であった。事後アンケート調査では、「家族との交換ノート」の取り組みや実践発表した事業所へ見学したことが分かった。

当日及び事後アンケート調査結果より、当日アンケートで「取り入れたい内容」と研修会後に実践している内容は、一致する部分が多かった。具体的には、「構造化」「利用者の強みに着目する」であった。この２つがあがっている理由として、北九州市発達障害者支援センターが「構造化セミナー」や「応用行動分析研修会」「実践報告会」等の研修会を長年にわたって開催していることが考えられる。反面、当日アンケート調査では「コミュメモ」や「ソーシャルストーリー」があがっているが、事後アンケート調査ではその記述はなかった。

その理由としては、実際に現場に取り入れる際は、その手法に関する研修の必要性があるためだと考えられる。また、研修会に参加したことを契機に、アセスメントの重要性や職員意識の向上、家族との連携を認識し、一部取り入れたり、取り入れようと努力している様子が伺われた。

しかし、回答者の 61%が研修会で学んだ内容を実践しておらず、その理由として、今回の実践報告の事例と回答者の現場が異なっていることや、物理的･人的な環境調整が難しいこと、職員の知識不足や未経験等があがっていた。その背景には、市内の事業所や職員の経験や環境によって、行動障害がある自閉症者への理解や対応には、かなり温度差があることが考えられる。事後アンケート調査結果では、このような実践的な研修会を望む声が多くあったため、今後も実践報告や事例検討等研修会を継続することが必要と考える。また、研修会に参加した一部の職員だけが取り組むことは限界があるため、職員全体が共通認識を持つためにも、福祉サービス事業所に対する機関コンサルテーションを強化したい。加えて、「発達障害者支援のための初級セミナー」や「構造化セミナー」、「実践報告会」等各種研修会を促進し、市内全体のスキルアップを目指したい。

資料２－２

平成 26 年度

北九州市発達障害者支援モデル事業

成人期の自閉症者への支援の実際

～福祉サービス事業所の実践に学ぶ～

期日：平成 26 年 10 月 26 日（日）9 時半～12 時

会場：北九州市総合保健福祉センター　アシスト 21（2 階講堂）

主催：北九州市

北九州市福祉事業団北九州市発達障害者支援センター　つばさ

後援：北九州市教育委員会　北九州ＬＤ等発達障害親の会「すばる」

北九州市自閉症児者の未来を考える会　　北九州市自閉症協会

北九州市手をつなぐ育成会

時　程

１０月２６日（日）

時間	スケジュール
９：００	受付
９：３０	あいさつ
	実践報告　　１．桑の実工房 所長　桑園英俊氏 ２．八幡西障害者地域活動センター 支援員　喜多剛一氏 ３．癒とりの里 サービス管理責任者　原敏樹氏
１１：００	休憩
１１：１５	パネルディスカッション・質疑応答
１１：４５	納富先生からのコメント
１２：００	終了

納富恵子　（福岡教育大学　大学院　教育学研究科　教授　）
教職実践専攻　生徒指導・教育相談リーダーコース担当

山口県出身、昭和 58 年九州大学医学部卒業後同大学精神科神経科入局。
平成 2 年　福岡教育大学障害児教育講座に移り、発達障害児の教育的支援について研究
　福岡教育大学教育学部教授を経て　平成 21 年 4 月より　現職
役職など　「ＬＤ研究」「特殊教育学研究」編集委員
　　日本自閉症協会福岡県支部　顧問　福岡ＬＤ児者親の会「たけのこ」アドバイザー
　　過去　福岡市児童福祉審議会委員・福岡県県立学校教育計画審議会特別委員など
研究　発達障害児者の支援の洗練に、重要な要素を実証的に明らかにする
　自閉症児の家族支援プログラムの効果研究、家族のニーズ研究、高機能自閉症児へのＳＳＴ

著書

１）ＬＤ児の教育支援　(2000)　保育出版社　　２）ＬＤと医療　(2001)日本文化科学社
３）現代のエスプリ　－ＬＤ（学習障害）の臨床　その背景理論と実際－(2001)　至文堂
４）学習につまずきのある子の地域サポートーLD/ADHD/広汎性発達障害児の援助－　(2001)　川島書店
５）Autism,The Search for Coherence,（共著）　Richer &　Coates Ed. Behavior management of Fukuoka University of Education,(2001)　Jessica Kingsley
６）自閉症の TEACCH 実践（共著）佐々木正美(編)福岡教育大学附属障害児治療教育センターにおける実践-サービスモデルの開発と自閉症児と家族の変化を中心に, (2002) 岩崎学術出版
７)ヒルガードの心理学(共著)　内田一成(監訳) 第 2 章 心理学の生物学的基礎 Atkinson, R.L., Atkinson, R.C., Smith, E.E., Bem, D.J. and Nolen-Hoeksema, S.: Hilgard's Introduction to psychology thirteenth edition. Wadsworth publishing, (2002) ブレーン出版
８）情動とストレスの臨床医学（共著）　田代信惟(編) １．小児における情動の発達過程,情動とストレスの神経科学, (2002) 九州大学出版会
９）精神障害の予防をめぐる最近の進歩　小椋力編　Determinants of parental satisfaction with disclosure of autism spectrum disorder in Japan,（共著）（日本における自閉症圏障害の診断告知に対する親の満足度の決定因子）(2002)　星和書店（英文）
10) 特別支援教育の理念と実践　(2006) ナカニシヤ出版　（監訳）
11) イラスト・まんが教材で気持ちを理解　自閉症スペクトラム児の発達支援　(2006)　川島書店
　　今泉佳代子・黒木康代との共著
12) 絵カードを使った障害者歯科診療　視覚支援の考え方と実践（2008）　緒方克也編集　医歯薬出版
13) 自閉症の基本障害の理解とその支援・対応法（2009）上岡一世監修　納富恵子編著　明治図書

論文　2002 以降

１）納富恵子・河村　暁・吉田敬子(2002)　LD と ADHD 児へのグループアプローチ，臨床心理学，金剛出版，2(5)，598-604
２）山田　信・納富恵子・黒木俊秀・田代信雄(2002) 強迫症状を呈したアスペルガー症候群成人例に対する箱庭療法の試み，臨床精神医学，アークメディア，31(10)，1215-1222
３）黒木康代・納富恵子・原口尚子・今泉佳代子（2005）高機能自閉症児の感情認知に関する研究 - 理解と表出の二側面からのアセスメントを通して - 福岡教育大学障害児治療教育センター年報　18；7－13
４）緒方あかね・納富恵子（2005）　概説　自閉症児へのコミュニケーション指導 - 本邦における 1990 年代を中心とする指導方法の分析 - 福岡教育大学障害児治療教育センター年報　18；27－54
５）黒木康代・納富恵子（2005）　長期間持続していた服濡らし・放尿の行動障害への包括的アプローチ - 知的障害者施設における実践を通して -，特殊教育学研究 43（1)；21-30
６）奥野小夜・納富恵子(2007)　高機能自閉症児へのコンピュータ学習を動機付けとしたソーシャルスキルトレーニングに関する研究，LD 研究　16（2)；136－144

その他

１）河村あゆみ・納富恵子・河村　暁（2002）米国の大学における LD をもつ学生のためのプログラムの実際，LD 研究，11，3，293-298
２）納富恵子・中山　健:（2002）文部科学省委嘱「学習障害児に対する指導方法等に関する実践研究」の成果（福岡県），LD 研究，11，3，260-266
３）納富恵子(2004)　ADHD の子をもつ家庭　いま求められる親の条件　児童心理　臨時増刊 100-103

対人関係でトラブルをくり返す Aさんへの支援

～成人期の自閉症者への支援の実際～

社会福祉法人　桑の実会
障害福祉サービス事業所　桑の実工房
所長　桑園　英俊

〒807-0075
北九州市八幡西区下上津役３丁目１番７号
TEL/FAX　093-612-6045
MAIL　kuwanomi@icom.home.ne.jp
HP　http://www.kuwanomi.org/

Aさんのプロフィール

1. 性別等　女性＜身長147cm･63kg＞
2. 生年月日　昭和37年1月　＜現在52歳＞
3. 主障害　発達障害＜アスペルガー疑＞
   H21　精神保健福祉センター診断
4. 療育手帳　B1
5. 障害程度区分　3＜平成24年度⇒4＞
6. 疾病　高脂血症
7. 通院　◇◇精神科1/2ヶ月　〇〇内科医院
8. 服薬　デパゲン･リスペリドン＜頓服＞　他
9. 家族構成
   【同居】父＜81歳＞元小学校校長･ 母＜H26.9死去＞元教員
   【別居】弟（41歳）無職･妹（34歳）精神科通院

2

Aさんの生活歴

- S49　A中学校
- S52～S55　A女子高等学校
  ＜この間アルバイトを数度行うが定着せず、長期在宅で過ごす＞
- H6～　ボランティア協会･支援センター
  北九州自立生活Cとの関わり
- H7　療育手帳取得
- H10　支援C「レッツ」に両親と来所
- H10～H12　A学園＜障害福祉事業所＞
- H16.2～5　B作業所
- H17.1～8　C作業所
- H18.3～5　つばさで能力判定

3

利用前の情報＜他機関資料より＞

- 興奮すると暴言、罵声が1時間程続く。
- 利用者に対する暴言･他害。退所をくり返す。
- 買い物時、定員さんに執拗な暴言。出入禁止。
  複数の店舗で感情爆発。
- 福祉社会館で感情爆発。参加制限。
- バス車中で運転手さんへ感情爆発。警察連絡。
- 男性利用者宅に執拗な電話。
- 関係機関への執拗な電話。
- トラブルが多く、受け入れる事業所が無い。

4

桑の実工房　利用の経緯

1. 平成18年　A区役所保健福祉課より相談
2. ケース会議　＜4回実施＞
   - 参加者
   - A区保健福祉課主査
   - 北九州市地域生活支援センター「レッツ」
   - 北九州市発達障害者支援センター「つばさ」
   - 北九州自立生活センター
   - 桑の実工房
3. 幾つかの事業所を見学後、桑の実工房を希望
   実習体験後　H19.4より利用開始

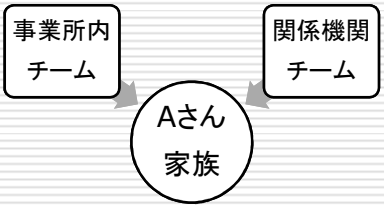
5

利用後の感情爆発場面

- 対象となる所員への大声威嚇。止められない。
- 特定の利用者＜時々で変化する＞への
  被害妄想的な思い込みによる暴言と攻撃
- 特定の男性所員への執着。男性宅や職員への電話を執拗に繰り返す。
- 母親への暴言、他害行為。
- バス車中で乗客と口論。警察署に保護
- 眼鏡店との定員へ暴言。工房へ連絡
- 自宅にKが入って物を盗んで行った。警察へ連絡して騒ぎとなる。

6

2つのチームアプローチ



- 1人の支援者に任せない。全員で支援する。
- 1つの事業所に任せない。関係機関で支援する。
- マネージャーを明確に。チームが稼働する方法を明確に

7

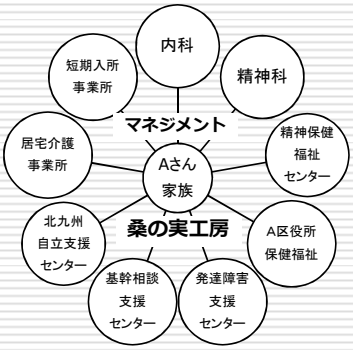
関係機関チームアプローチ

専門機関・キーパーソンと
支援困難な内容を
共有する

- 緊急に対応が必要な内容
- 現在の本人・暮らしの環境で支援が必要な内容
- 直近に予想される困難への支援内容

8

関係機関との情報共有



連携会議

H21.2
精神科受診に関して
H21.7
ヘルパー利用に関して
H24.7
短期入所利用に関して
H25.12
計画相談に関して

情報共有はメーリングリストを活用して行う

9

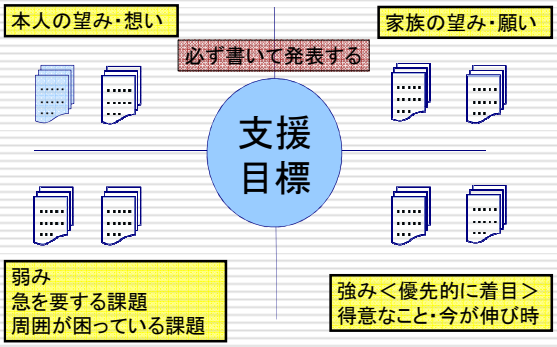
事業所内チームアプローチ

個別支援会議で
目標と具体的支援内容
支援方法を共有する

- 個人の力量でなく、チームの総量で目標を決める
- 支援に関わる全員が目標設定の過程を共有する
- 目標設定にある背景を全員が共有する

10

目標設定時のBS手法



11

支援目標決定時に欠かせない視点

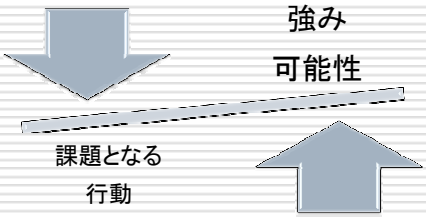
本人の「強み」「可能性」に
着目した目標であること

- 何より本人が「生き生き」と取り組める目標設定
- 生活に大きく影響していない「できないこと」を
  わざわざ目標にしない

12

2つのアプローチ

- 課題となる行動を改善する支援
- 本人の「できる」「強み」を伸ばす支援



13

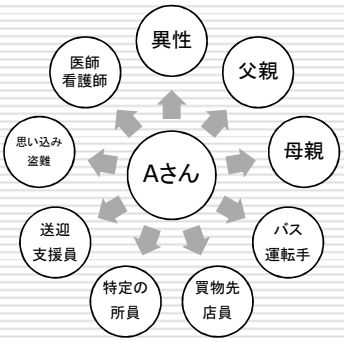
課題となる行動へのアプローチ

情緒・行動の記録をとり
分析をして
主訴を絞り込む

- 項目の設定＜予想される要素・行事・睡眠等＞
- 主訴は支援者が思いもよらぬことにある場合も
- 主訴がわかれば、事前の配慮・支援が可能になる

14

感情爆発の主訴となる対象



15

課題となる行動へのアプローチ

ルールを
本人に分かるツールで
明確に伝える

- 文にしてノートに書いて伝える。
- 行動を具体的に書く。「1人で病院には行きません」
- 言葉・・思い込み。自分に都合よく変更。

16

課題となる行動＜通勤時＞へのアプローチ

通勤時の
対人トラブルを
防ぐ支援

ルールを伝える⇒感情を押さえられない
◆交通機関が家庭訪問。利用を控えて欲しい。H24.8
送迎支援員での送迎⇒送迎支援員への攻撃的言動
最終的支援⇒支援員が送迎　H25.11

17

課題となる行動＜医療機関＞へのアプローチ

医療機関受診時の
不安を軽減し
ドラブルを防ぐ支援

- 支援者・看護師が一緒に受診　＜本人・家族任せにしない＞
- 医師の助言内容を、本人が分かるように伝え直す
- 服薬の分類は事業所で支援者の助言で行う
- 本人が希望する受診の判断は看護師・所長が行う

18